

文学 〈五〉

文学史

谷川俊太郎

今回の学習のポイント

「谷川俊太郎」について知ろう！

国語監修・執筆

中澤 匠吾

谷川俊太郎（たにかわ しゅんたろう）

昭和六年（1931）〜。東京出身。詩人。詩作のほか、絵本、童話、脚本、エッセイなど、幅広い創作活動をしていることでも知られる。また、海外児童文学の翻訳なども手がけている。

十八歳のころから詩作を始め、昭和二十七年（1952）に詩集『二十億光年の孤独』で詩壇に登場し脚光を浴びる。その後、現代詩の同人誌『権』『歷程』などに参加。
代表的な詩集 『二十億光年の孤独』『六十二のソネット』『夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった』『世間知らズ』など

広く名の知れた現代詩人

谷川俊太郎の詩は、小学校、中学校、高校の教科書に数多く取り上げられていて、ほとんどの人がその名前を聞いたことがあり、どこかでその作品に接したことがあるのではないかと思います。『春に』『信じる』『いのち』など合唱曲になっている作品もいくつかあり、それで知っているという人もいるかもしれません。また、有名なアニメ主題歌「鉄腕アトム」の作詞も手がけています。作品の数の多さもさることながら、作風も幅広く、きわめて知名度の高い詩人の一人といえるでしょう。

『二十億光年の孤独』

処女詩集のタイトルともなっているこの作品は、教科書にしばしば取り上げられる代表作の一つです。「二十億光年」という広大な宇宙空間の中に存在する、小さな地球の上で生きている人類の孤独や不安が描かれています。宇宙という視点、科学的な用語の使用、火星人の登場（火星人の話す造語のユニークさ）など、独特の感性によって表現されています。

興味のある人は、高校講座「国語総合」（第33回）でこの作品を詳しく扱っていますので、聴いてみてください。

詩の中の「言葉」

番組で谷川さんは、「どうして書けたのかわからない詩」があると語っています。しかし、それこそがおもしろい詩でもあるのだといえます。番組で取り上げる『芝生』という詩もその一つと評しています。どのようにして詩の言葉が生まれるのか、ということがポイントになります。

詩の言葉のありようについても触れています。「その辺の道端に咲いている花みたいな詩が書けたらいい」と語っています。その真意はどういうことなのでしょう。そこには、言葉の「意味にとらわれない」という一つの考え方が示されているようです。

また、「意味」を表すということ以外に持つ「言葉の力」について、「音楽」にたとえて表現されています。音符の積み重ねで一つの音楽が生まれるように、言葉と言葉が結びつくことによって、言葉で表せない詩のエネルギーが生まれる……。それは、言葉を持つ「意味」とは切り離されたところで感じられる音であったり、詩の世界の全体像、イメージであったりするのでしょう。

おとめ

谷川さんのインタビュアーから、言葉をどのように扱い、作品をどのように生み出しているのかを知ることができます。そして、私たちは言葉とどのように向き合い使っていくべきなのかということについて、一つのヒントを与えてくれます。

高校の国語では、詩を鑑賞し内容や主題をとらえるということを学習します。しかし、そうした読解の前に、まず詩を「感じる」、選ばれた言葉一つ一つによって紡ぎ出された作品の世界観に触れてみるということはとても意義深いことです。番組で取り上げたもの以外の作品もぜひ読んでみてください。きっと、親しみや共感を覚える作品にも出会えるのではないのでしょうか。

